

室内移動のしやすい歩行補助車

Indoor Wheel Walker for the Aged

AD14 北澤 俊一
指導教員 杉島 一男
竹内 明

1. 研究目的

杖を必要とする高齢者や手すりのある廊下で転倒してしまう高齢者には、室内での活動も補助する必要がある、それにより日々の生活、活動への意欲を与え健康的で快適な生活を営めるのでは、と考え歩行器の研究に取り組むことにした。

2. 調査と分析

ユーザー調査で訪問した老人ホームで歩行器は、機能面では特に問題は無く使用されていたが、使用者の方達も気にかけていたように見た目の印象がネガティブな病院的・病人的なイメージを与えてしまっている。

一般的な家庭での使用を考えると、全体的にスペースが狭い、段差が多い、開き戸が主である事などから十分にその機能を果たす事せない。

最近住宅の高齢者配慮（バリアフリー住宅）により室内での生活は施設面から改善されつつある。しかしそういった住宅においても施設面からは補えない部分を補える歩行器が必要である。

既存の商品は交互型・固定型・二輪型・四輪型に大別出来るが、そのほぼ全てが高さの調節が可能で、アルミ・スチールパイプを主に、同じような形状、大きさをしている。

四輪型の歩行器を使用し、日常生活で想定される基本的な場面（立ち上がり動作、移動、洗面、トイレ等）を実際の空間と、仮想的な空間で検証を行った。バリアフリーの住宅は一般住宅に比べ、それぞれに広いスペースが確保されているが、トイレや個室での運用をよりスムーズにするために改良すべき点が多々ある事を実感した。

3. コンセプトの立案

スムーズで快適に暮らせる歩行補助車

- ・室内間の移動を楽に
- ・様々な動作を楽に
- ・室内に調和するデザイン

今回の提案は高齢者配慮なされた空間での使用を前提とし、さらに快適な生活を送れるようサポートする歩行補助器具をデザインする。

4. デザイン展開

家庭でスムーズに使用するには、よりコンパクト

にする必要がある。運用中角が引かかる事が多々あった為、角を無くしよりコンパクトにするため前輪間の距離を詰めた。また押しやすくなるように角度つけ、握る位置を手前にした。

立ち上がる際の握りは後脚に腕があたり握りづらかった為、形状の変更に加え、握りを若干外側に開いた。また手前が上がるように角度を設け力がより入りやすくなるようにした。

歩行器の使用時には両手が塞がってしまい物を運ぶことが出来ない。食器程度の物や、重い物も運べるように洗面所等での使用時に邪魔にならない広さで、上下二つ設置した。

歩行器のパイプむき出しの見た目は、家庭に持ち込むと周りとの違和感が非常に強い。家庭で使用すること、手で触れる物であることを念頭にあたたかさや、やわらかさを意識し、主な部分を木製とし曲線をメインに造形を行った。

5. 完成図



6. 結論

体について来る感じがして使いやすい。（立ち上がる際の握りが）使いやすくなった。もう少し大きいほうが安心感がある。などの感想、評価を頂けた。目標としていた機能面の改善点はある程度クリアされたと思うが、デザイン面に関しては洗練不足であったと思う。

7. 参考文献

バリアフリー住宅 ―あたりまえにくらす家―
（株）建築資料研究所